

## 研究の窓

### 障害者福祉の課題

「さまざまな事業が展開されているが、何かたいせつなものが欠けているために、十分な安心を用意できないでいる」というのが、日本の障害者福祉の現状についての私の印象である。最大の問題は障害者福祉が「社会の片隅」の問題として扱われていることである。

私が利用している鉄道の場合、車椅子を使う人が自力でホームに登ることができる駅はひとつもない。近年、地下鉄の駅に昇降機が取り付けられているが、いちいち駅員をわずらわさなければならない。当然のこととして、その種の装置が実際に使われているのを見るのはきわめて稀である。エスカレーターでさえ、完全につながっていない場合がある。街のなかへ車椅子ででかけるのは、介助者がいたとしても、きわめて困難である。

東京から新幹線と在来線を乗り継いで車椅子を使う人が自力でどこからどこまでならば旅行することができるのか、JRはぜひ公表してほしい。東京駅のなかでさえ、ホームからホームへの自力での移動は不可能である。近年は職員が親切に対応してくれるが、時間と手間と労力がかかるし、当事者側の心理的負担は大きい。バリアフリーのための建造物の改良が多少はおこなわれているが、地域全体がバリアフリーになっていないから、効果あまりない。大学などの新しい校舎をバリアフリーの構造に変えても、古い校舎が階段を利用するほかない状態になっていれば、障害をもつ学生の受け入れも、障害をもつ教員の勤務も、実質的に不可能である。

日本では、これから建築されるすべての住宅を最初から障害者（高齢障害者を含む）にとってバリアフリーにするように建築基準そのものを変えようではないか（北欧諸国ではとっくのむかしにそれがあたりまえになっている）、という声が起こってこない。まれに少数の人間がそうした提案をすることがあっても、誰も相手にしないのである。

その種の「中途半端」は、ハードウェアだけではない。ヒューマンウェアの面でも同じ状況が見られる。最近、地域の障害者福祉事業に専門的にかかわっている人々の討論を聞かせてもらう貴重な機会があった。そこで強調されていたのは、「重い障害を抱えている人とその家族にたいする福祉の事業において不可欠なのは、日常的に接触して相談に乗り、適切な支援の方法を見つけだす取り組みである」という点であった。パネリストのすべてがその種の人材の決定的な不足を認めていた。しかし、パネリストたちは、異口同音に、「いまの制度ではその種の人材の確保は不可能である。インフォーマルな組織に期待するほかない」と語っていた。それがその討論会の結論になりそうであった。日本の社会福祉の関係者が共有しているかに見える「あきらめ」の空気が、そこにも漂っていた。「何をいっても仕方がない。日本の社会福祉の抜本的改善は不可能だ」というあきらめである。

私は、黙っていられなくなって、「なぜ、その種の人材を十分に確保できるように日本の制度

を根底から変革する必要がある、とおっしゃってくださらないのですか。社会福祉の本質は人間と人間の継続的な接触であり、人間にたいする理解と信頼であるということを強調してくださらないのですか」と、フロアから発言してしまった。

先進社会の社会保障・社会福祉の目的は、「弱者救済」ではない。社会的共同事業によるすべての人間にたいする「安心」の給付である。高齢化や事故による障害を負うリスクは、すべての人間の問題である。しかし、日本では、社会保障と社会福祉がばらばらに扱われ、社会福祉の事業も、障害の内容などによってばらばらに扱われている。同じ障害者福祉の枠組みのなかで扱われるべき高齢障害者とその他の障害者が、制度のうえで切り離されている。そのためもあって、障害者福祉はいつまでたっても「弱者救済」型の慈善事業から抜け出せないでいるし、社会の片隅の問題として扱われている。

障害者福祉の抜本的な改革・拡充・強化を社会全体の課題として提起することは、社会保障・社会福祉の総合化を推進し、教育を改革し、日本の社会のあり方を変え、経済のあり方をも変える大きな事業の一環であるということが強調されてよいのではないか。

正 村 公 宏

(まさむら・きみひろ 専修大学教授)